

の1.5倍の成長が認められ、オトガイ軟組織の前方移動が差が認められなかった。
みられたが、中顔面下顔面の相対的な位置関係には有意

29. 精神薄弱者の歯周疾患初期治療及びメンテナンス —10年間にわたる治療効果—

清水 学, 文田博文, 坂東省一
稲場昭人, 加藤義弘, 藤井健男
石井克枝, 平松智一, 奥村 浩
牧野隆樹, 松尾廣久, 石岡高志
大井戸真理, 河合 治, 野村昌人
高松隆常, 小鷲悠典

(歯科保存Ⅰ)

目的 心身障害者に対する口腔の健康管理はきわめて遅れており、特に歯周疾患の診査や治療に関する報告は少ない。本研究の目的は、精神薄弱者の10年間の歯周組織の変化を分析し、歯周組織の健康を維持するために必要な方法を検討する事である。

研究対象および方法 新篠津村の精神薄弱者更生施設「更生園」に入園している有歯顎の成人45名を対象とした。年齢は、昭和55年の初診時で17～52歳、平均33.1歳であった。最初に日常生活指導をしている指導員にブラッシングの重要性の認識とブラッシング方法を習得させた後、精神薄弱者のブラッシングの習慣化を計った。初診時から2年間で全員が初期治療を終了、その後6ヶ月毎に指導員を交えたブラッシング指導とスケーリングを中心としたメンテナンスを現在まで継続している。

結果及び考察 本研究は、歯科医師や衛生士が精神薄弱者に直接指導するのみでなく、施設の指導員が毎日の生活の中で口腔清掃指導できる体制をとり、口腔清掃の強

化を計りながら6ヶ月毎の定期的な口腔清掃指導とスケーリングを行い歯周組織とその機能維持への効果を検討した。その結果、イニシャルプレパレーション中にPCR, Modified GI, PoRが著しく減少し、10年後の現在もほぼ一定の値を維持している。さらに喪失歯数も低く、効果的なメンテナンスである事が裏付けられた。長期に渡る本研究では、指導員の退職等による口腔清掃指導力の低下や新指導員への新たなモチベーション及び指導が必要である。さらに、歯周組織の健康の悪化が見られる症例も一部あるので現在行っている6ヶ月というリコール感覚を短縮する事も検討中である。

結論

1. 本法は、歯周疾患の治療、維持に効果的であった。
2. より効果的にするには、メンテナンスの期間を短くする必要があると考えられ、また指導員への新たなモチベーションが必要である。

30. 重症心身障害児者における栄養評価法の検討

渡部 茂¹⁾, 上田正彦¹⁾, 五十嵐清治¹⁾
市田篤郎²⁾, 岡田喜篤³⁾

(小児歯科¹⁾, 口腔生化学²⁾, 社団法人札幌あゆみの園³⁾)

【目的】 一般に重症心身障害児(者)は生活が抑制され、摂食法にも制限があるために栄養状態が良好とは言えない例をみることが多い。なかでも臨床上、特に重要と思われるものは蛋白栄養障害であり、これが進行すると創傷治癒遅延、易感染性の増加など、様々な悪影響がもたらされることが知られている。これら重症児(者)

に対する栄養評価をよりの確に行うための基礎として、今回特に蛋白栄養状態を中心に幾つかのパラメーターについて検討を行った。

【方法】 対象は重症心身障害児(者)施設の入所者で、4歳から58歳の男女計114名について、身長体重測定、皮下脂肪測定、尿中クレアチニン排泄量の測定を行った。